



南郷

札幌市立南郷小学校 学校だより 第8号
令和6年10月31日

【学校電話】011-861-9305

【学校ホームページ】

<https://www.nango-e.sapporo-c.ed.jp/>

茶の三煎を味わうが如く、壁を楽しむ

校長 関根 治彦

中休みに学校の中を回っていると、教室で、リコーダーを吹いている女の子が二人いました。声をかけてみると「合格できなかったの、だから練習するんだ。」と言って曲を吹き始めました。最初は指遣いがたどたどしかったり、息遣いのタイミングが合わなかったりしていましたが、一緒に練習していると目に見えて上手になってきます。その子たちは次の日もリコーダーの練習をしていました。そのうちに見かけなくなりました。しばらくして、教室を回っていると音楽の時間にみんなと楽しそうに演奏するその子たちの姿がありました。

茶は昔から日本人に大変親しまれてきました。いったいどこにそんな魅力があるのでしょうか。茶は三煎（さんせん）して味わうのがよいとされています。

一杯目、湯の温度を比較的低めにして茶を入れると茶の甘みが出てきます。甘味は、一般に誰もが好みます。そのため、ペットボトルの緑茶などはこの甘みを引き立てているものが人気となっています。いわば入門編というものです。ただ、この甘みに満足していると、本当の茶の旨味に気付けないとも言われています。

二杯目、今度は湯の温度を少し上げると、茶の苦味が出てきます。苦味は大人の味で幼い子どもにはあまり好まれません。実はこの苦み成分には気分を改善し、爽快にする作用があり、慣れてくると嗜好性が強いのです。（ビールなどと一緒ですね）茶本来の旨味を味わうためには、少しずつこの苦味（苦しみの味）が必要となってくるでしょう。

最後に三杯目ともなると、茶特有の渋みが出てきます。甘味と苦味を味わったものだけに分かる深い味わいです。柿の甘さは柿の渋が変化したもので、砂糖の甘さとは違い成長した甘味、成熟した甘味です。言い換えれば渋みの中に深い甘味があるすばらしい味です。

この三煎を人生にたとえる場合があります。親を始め、多くの人たちの愛情・温かさ・いたわりに支えられて成長していく甘みの時期。自分の夢を実現するため、甘味を味わってきた心の糧を使い、苦しみながら乗り切る苦味の時期。そして、甘味と苦味を味わったものだけに分かる落ち着きと人柄で出てくる渋味の時期。このように考えると茶の味は私たちの人生そのものといえるでしょう。本質や本当に大切なものを手に入れるためには、現状で止まるのではなく、いくつかの乗り越えていかなければならない壁があるという教えでもあります。

前述した教室でリコーダーを練習する子どもたちは、まさに1つめの壁を乗り越えていたよい例です。音楽は、まずは一人一人が楽器を弾けるように、パート毎（低音部、高音部など）が歌えるようにがんばらねばなりません。自分の思うようにできないことでもこつこつとがんばって乗り越えていく、いくなれば苦味を味わい、「自分の音を楽しむ」時期です。

一人一人が楽器を弾けるようになったり、歌えるようになったりすると楽しくなってきます。しかし、「私の音を聴いて!」と言わんばかり、他の楽器に負けないように大きく弾いたり、他のパートに引きずられないように耳をふさぎながら大きく歌ったりしている子もいます。そうすると「回りの音を聞いて!」「〇〇（楽器名）は、ここは弱く弾いて」などの指導が入ります。自分の弾きたいように、歌いたいようにできなくなります。すると回りの音が聞こえてきます。今まで、自分の音だけが響いていたものが、他の学級の音との重なりやハーモニーに気が付いてきます。「曲を創り上げる楽しさ」を味わう、渋味の時期です。

この過程は何も音楽だけの話ではありません。劇であったり、プレゼンであったり、運動であったり、学習発表会で行われる多くのものもこれに該当します。この練習の時期で壁を乗り越えていくことは容易なものではありません。しかし、その先には「自己肯定感の高まり」があります。そして、その原動力になるものは、子どもたちの内発的動機である「うまくなりたい」「たのしい」ということと、外発的動機である『友達とのがんばり』や『保護者の皆様や教師の温かい声かけ』なのです。保護者の皆様には、是非とも現在の練習の様子を聞いていただいた後の『励ましの声かけ』と、終了後の『がんばりを讃える声かけ』をしていただければ幸いです。子どもたちには是非、学習発表会での「三煎」を味わってほしいものです。